
聖夜に祈りを

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜に祈りを

【Nコード】

N5175Q

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

冬休みを迎えたエンゼルハウスの子どもたちは、クリスマスを楽しみにしている。

リンリン。

「はい、エンゼルハウスです」

事務長の中田寛一は電話を受け取ると、一号室の佐々木愛に電話だと告げる。

バタバタと走って来る愛。

「はい、あ、おばあちゃん、いつ来てくれるの」

「わかった。荷物して待つてる」

電話を切ると走って中田の元へ来る。

「中田先生、私、お正月の三日までおばあちゃんのところへ帰りま
す」

「ああ、よかったね。愛ちゃん」

今日から冬休み。この施設の子どもたちも大半は親戚が連れに来
る。

五号室の真鍋さおりが部屋から顔を出す。小学一年生だ。この子
は父親が長距離トラックの運転手でまだ連絡がない。母親が去年乳
がんで亡くなってからここへ来た。

玄関のブザーが鳴る。

さおりが廊下に出てくるが、顔を見るとまた部屋へ入る。

「ごめんください」

「はい」

七号室の田中姉妹も母親が来た。この母親は夜の仕事だが、クリ
スマスイブの今日は休みだからと迎えに来た。母親は二人を預けて
働いている。

「中田先生、行ってきます」

「ああ、メリークリスマス」

「お母さんの手、あったかい」

小学三年生と五年生の田中姉妹は母親と手をつないでいく。いつ

もよりずっとおしゃべりだ。

このエンゼルハウスはいろいろな事情で親と暮らせない子どもたちを預かっている。一応乳児は男女なのだが、小学生以上は女子だけだ。昨今子ども数は減っているはずなのに、預けられる子どもは増えてきている。中田はここで勤めて二十八年だ。

中学二年生の初田ヒロ子は、継母に子どもができてから疎ましがられて、小学二年生からここにいる。ヒロ子はさおりの様子を見て声を掛けた。

「さおりちゃん、折り紙しようか」

「うん」

エンゼルハウスの遊戯室には折り紙やお絵かき帳、パズルや本などは十分とは言えないが一応ある。

さおりはヒロ子の後をついていった。

「動物を作ることしようね」

ヒロ子は折り紙の本を開くと、簡単なキツネ、パンダなどを作っで見せる。見よう見まねでさおりも作る。細かいところは手伝ってもらいながら仕上げていく。

「上手じゃない、さおりちゃん」

褒められるとニコツと笑う。

リンリン。

さおりの顔が電話へ向く。

「はい、エンゼルハウスです。ああ、村田さん、ちょっと待っててね」

名前を聞くと、さおりはまた折り紙に目を落とす。

バタバタと電話口へ走る子ども。

「中田先生、私、冬休み中おじちゃんがかうちにおいでって言うてくれた」

「そうかい、お母さんの弟さんだったね」

村田リカの母親がうつ病になってから、この母親の弟が時々様子を見てくれる。この家にも同い年の従兄もいるので楽しいのだとい

う。

さおりはヒロ子に向かってこう言った。

「この動物たちを一つの家族にしようか」

「うん、いいよ」

キツネもパンダも家族なのだ。

「中田先生、新聞もらっていいかな」

「いいよ、何にするんだい」

「家を作るの」

新聞を渡すと、さおりは細長くちぎりだした。

「ここは台所、ここはお風呂、勉強部屋はここにしようつと」

さおりは新聞で仕切りを作っていた。遊戯室の机といすを片付けて、広々とした大きな家の部屋割ができた。

ヒロ子も画用紙を取り出して家具を作りだしていた。ベッド、ソファ、本箱。さおりはなぜかケーキ、ツリー、プレゼントの箱などクリスマスグッズを作っていた。

ピンポーン。

さおりは手を止め、廊下走る。ヒロ子の父親がいた。

「ヒロ子ちゃんのお父さんだよ」

さおりが言うと、ヒロ子は玄関へ行った。

「お父さん、明日じゃなかったの」

「ああ、早く仕事が終わったから迎えに来たよ。だが、今日しか休めん」

「お母さんは」

「博を連れておばあちゃんのところへ泊まりに行った」

「そう、わかった。待ってて」

ヒロ子が遊戯室に戻って来た。

「中田先生、父が明日の予定が今日になったっていつから帰ります」
「そうかい、気をつけてね」

体をさおりの方へ向けると、ポケットから小さな動物のキャラクターがついたボールペンを出した。

「さおりちゃん、このボールペンあげる」

「あ、これ、付録で気に入ってたのに」

「私からクリスマスプレゼント」

「わあ、ありがとう」

ボールペンを両手で受け取ると、さおりは早速そのペンで絵を描きだした。

絵はドレス姿のヒロ子だった。ヒロ子は部屋からポストンバッグを持ってきた。

「ヒロ子ちゃん、この絵あげる」

今描いたドレス姿の絵をブリツと破って渡す。

「ありがとう、美人ね」

「クリスマスプレゼント」

バイバイと手を振るさおり。ヒロ子は父親と肩を並べて出て行った。いつの間にかさおりが中田の手をぎゅっと握った。

その日の夕食は中田とさおりだけであった。

「今日は鶏のからあげだね」

「美味しいな」

「ああ、後でケーキも出るよ」

「今日は一人占め。嬉しいな」

「食べたいだけ食べような」

「うん」

リンリン。

さおりの体がさつと電話へ向く。

「ああ真鍋さん。お待ちしてました。今から来れるんですか」
思わずピースサインをさおりに向ける。

「バンザイ」

さおりは走って電話を取りに来る。

「うん、うん。お父さん、いい子にしたよ。ほんとだよ。早く来て。玄関で待ってる……」

さおりの声は涙声になっていた。

電話を切ると、中田に飛びついて来た。

メリークリスマス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5175q/>

聖夜に祈りを

2011年2月5日20時12分発行